

裏妙義・裏谷急沢アイス 2015/01/25

メンバー：落合（CL）、齋藤（SL）、上小牧

天候：晴れのち曇り

裏谷急沢出合 7：30 柱状節理大滝 9：50 谷急山 12：00（大休止）12：50

北尾根下降 裏谷急沢出合 14：00

上信越道を走っていると横川付近で裏妙義の特異な山容が目に見え込んで来るが、妙義山塊の最高峰である谷急山はいちばん西に位置し、裏谷急沢はその名の通り山頂目掛けて一直線に突き上げる山塊随一の急峻な谷である。

沢登りでもよく登られているルートであるが、地形的にアイスクライミング向けな気がしていたので滝が凍っているのを期待して山頂までツメ上げてみようと思い、なんちゃってアルパイン・アイスを企画した。

メンバーは思考を踏まえ沢屋トリオで足並みが揃った。

1月下旬、今年は極端に暖かい日が少ないので氷結に期待していたが、出合からはじまるF1はお世辞にも発達してるとは言えず、これはアイゼンをガリガリさせるだけの冬の沢登りで終わってしまいそうな予感が頭をよぎったが、下部はドライ・ミックス・ベルグラなど不確定要素が多分にある登攀となる。

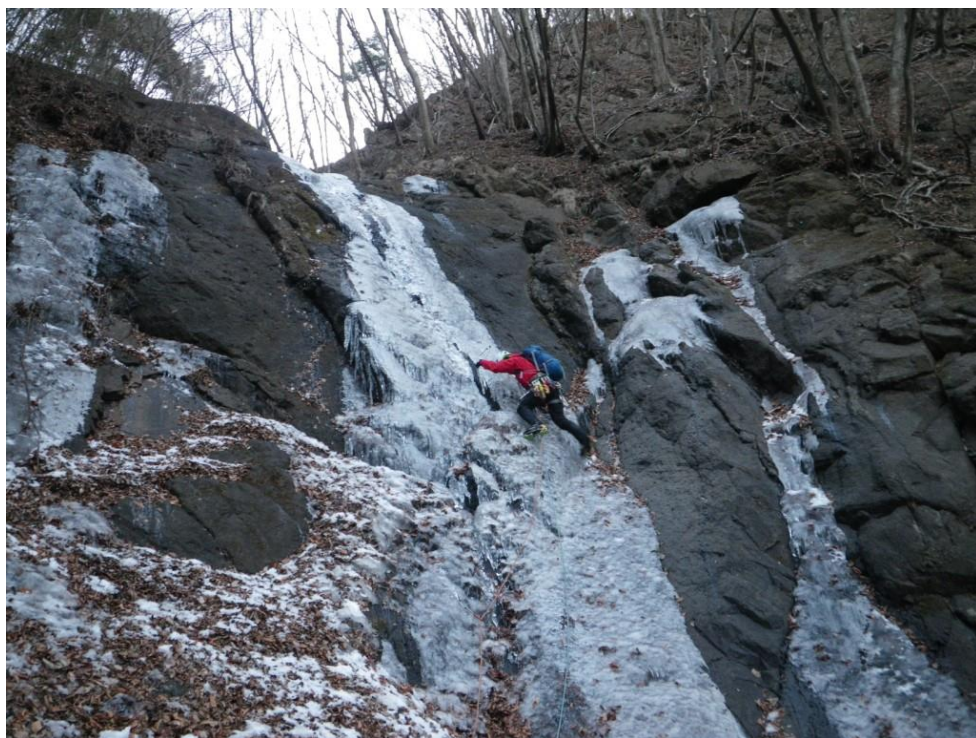
滝は巻く気になればすべて高巻けてしまう、しかしそれでは何を目的に来てるのか分からないし、沢のセオリーに反していると思い可能な限り水流突破、結局すべての滝に登攀した。

小滝は各々フリーソロで登り、登攀要素の高い滝だけロープを出したが氷の状態は当然ながら気温が高い下部が悪かった。

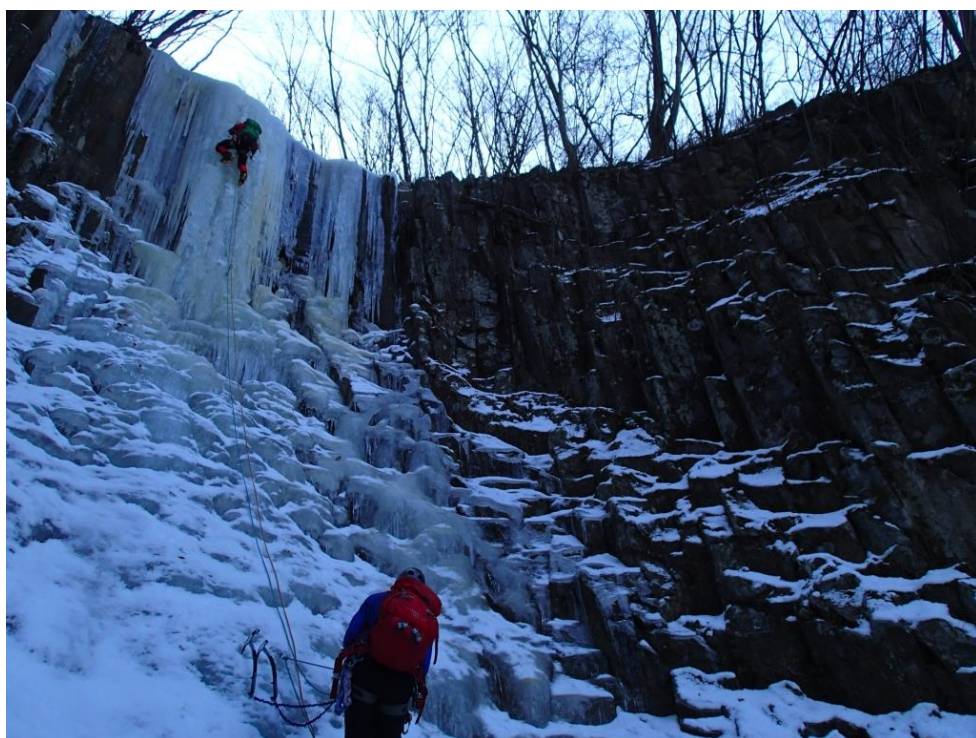
現場で判断する価値観を考え事細かな明記は避けるが、裏谷急沢のハイライトである柱状節理大滝は予想以上に発達していて“棚牡丹”だった。

初見で氷結状態を予測するのは難しいと思っていただけに、想像力を巡らせ思っていた以上の氷質に出会えた喜びはアイスクライミングの醍醐味と言える。この滝だけみればコンディションのいい時に登れたと思う。

写真では分かりづらいが近くに行くと地盤の影響なのか、イエローフォール？のようで妙義らしからぬ節理状の岩壁も相まって独特な雰囲気を出している。



下部の滝はベルグラやミックスでランナウトしながら苦労して登った。（簡単に高巻けるのに・・・）



柱状節理大滝 20m をリードする'のり牧さん' ヴァーチカルな登攀で抜け口が核心。

大滝から上部はナメが沢床いっぱいになり、凍結状態も非常によく快適な登りとなる。

途中、山頂直下で枝沢が何度か出会うが沢登りと同様に出来るだけ本流沿いをツメて尾根に出たが、最後の急登まで氷がしっかり繋がっていて汗だくになりながら山頂に到着。

移動性高気圧に覆われたこの日は無風快晴で山頂からは眼下に上信越道・妙義山塊・浅間山・遠く北ア・見える山はほとんどみえて、熱めのテルモスなんて飲む気になれず、こんなことなら缶ビールでも持ってくればよかったと後悔する。



下りは裏谷急沢と平行に走る北尾根を下降、途中ナイフリッジで左右スッパリ切れ落ちた崖尾根が続くが足元が滑りやすく凍っていたら迷わずロープを出した方がいい。

沢登りで遡行経験のある齋藤さんから下山尾根はナイフリッジとは聞いていたが、地形図だけみれば普通の尾根にみえるので大したことないだろうと高を括っていたが、雪が付くとなかなかヤラシク妙義の岩稜らしいスリリングな道で緊張感も増しアルパイン気分を盛り上げてくれた。

上小牧さん曰く、大滝のリードより北尾根のナイフリッジの方がよっぽど怖かったとか。。



北尾根の途中から、柱状節理の岩峰群の右に登った大滝が見えた。

日本国中は谷だらけと呼ばれているが夏の沢登りと冬のアイスクライミング、いずれでも遡行可能な沢は日本中探してもそう多くはない。

甲斐駒の黄連谷のように夏でも冬でも価値のある名渓やスケールとはいかないが、それが日帰りであつ比較的手頃に楽しめる裏谷急沢はなかなか貴重な一本と呼んでいいと思う。

しかし、妙義は流域面積が狭く標高が低いので時期を誤ると夏はヒルと格闘する可能性が高く、冬はただのアイゼントレになってしまうのでシーズンを見定めて入渓したい。（場合によってはそれが楽しい山行になる時もあるが、）

結果的には、沢登りという行為は夏でも冬でも我々の心を満たしてくれるのであった。

（記録：落合）